

## 公開講演会記録

## 中国近代思想と日本

早稲田大学政治経済学術院教授 齊藤泰治



## はじめに

19世紀後半、欧米のアジア進出にと  
もない、東アジアの伝統思想は外部か  
らの刺激を受けてどのように反応、対  
応したのか。近代史の大きなテーマで  
あるが、ここでは主として政治思想の  
面から考えてみたい。外部の文化に対  
して、伝統思想を断固として守るのか、  
外来思想を部分的に取り入れるのか、  
外部の思想を完全に拒絶するのか。対  
応にはいくつかのパターンが考えられる  
が、東アジアの日本、清国、朝鮮では  
どのような動きがあったのか。共通性と  
相違性はどの程度存在していたのか。

中国の近代とはどの時代を指すのか。  
中華人民共和国の公式見解ではアヘン  
戦争以降が近代で、その前が古代とな  
る。分野ごとに近代はいつから始まる  
かといった研究は行われているようだ  
が、少なくとも政治的にはアヘン戦争  
であることは間違いない。では、近代  
と現代はどのように区切るのか。19  
19年の五四運動までを近代とする考  
え方と、1949年までを近代とする  
考え方があるようだが、満洲事変から  
日中戦争を経て戦後までを含むこの30  
年間を近代とするのか現代とするのか。  
日本では近代と現代はどこで線引きを  
するのか、あるいは、modernの概念

とどのような関係にあるのか、といっ  
た問いが次々に湧いてくるが、今回は  
1910年代前半までを一応の区切り  
とする。古典中国と現代中国に対する  
日本人の中国観の分裂については、日  
本人の中国観は古典に対する尊敬と現  
代に対する無理解あるいは誤解に二分  
されるという面が、とくに日清戦争か  
ら激しくなったという説がある。現在  
では中国の変化も大きく、往来も盛ん  
になっていることにより、より複雑化  
しているかもしれない。

## 一・洋務派について

グローバル化といわれる中で、東洋

とか西洋という区分は、一般的にはそれほど意識することはないが、19世紀後半はそうではなかった。アヘン戦争後、太平天国が起こり、太平天国を抑える中で存在感を示したのが曾国藩、李鴻章らの洋務派官僚であり、西洋の技術を取り入れて自強（自強）をはかろうとした。今では洋務運動は普通に評価されているが、かつての革命中心史観では洋務運動はネガティブにとらえられていた。太平天国、義和団、辛亥革命という革命の流れに対して洋務運動から近代化への流れに対する評価は低かった。曾国藩にしても李鴻章にしても、考え方の中心には四書五経的なものがあり、内政、外交に関しても『易経』などを引いている。『校邠廬抗議』を著し、中体西用につながる思想をもっていたともされる馮桂芬にしても、伝統思想が非常に強く、「採西学議」で、「中国の倫常名教を根本とし、これを諸国の富強の術によって補えば、善に善を重ねることではないか」と述べている（鄭州・中州古籍出版社、1998年、211頁）。王韜という人

物は、西洋では電線を使って通信をしていることなどに注目し、洋務とはその長ずる所を用いることと述べている『岐園文録外編』鄭州・中州古籍出版社、1998年、218頁）。余談だが、この人物は1879年、約4か月にわたって長崎、神戸、大坂（当時）、京都、横浜、東京、日光などを訪れて『扶桑游記』（長沙・湖南人民出版社、1982年）を著し、日本各地の様子、各界の名士たちとの交流を描いている。鄭観応は、君民一体となり、上下心を一つにして、その中心となる体を定め、あとのものは用であるという。体と用とは中心の実体と機能のことで、実体はあくまで中国の思想という意識が強かった。代表的存在が張之洞という人で、『勸学篇』を著している。勸学は「学の勧め」となることからか、福沢諭吉の『学問ノススメ』との比較研究も行われている。張之洞は董仲舒らも引用しており、支配的な思想は変わっていないかったようである。この書は内編と外編とに分かれており、外編では外国留学にも言及している。科挙は1

905年に廃止されたが、日本に留学すると科挙試験の上から二つ目の資格を得たものと同等に扱うということもあって、日本への留学が増えた。張之洞は、「旧学は体、西学は用」つまり中体西用という言葉で知られている。本と末、体と用の中で道とか本とか体の方が中国の伝統的な学問で、末とか用は西洋からこれを取り入れればよいという考え方であった。

## 二・東洋伝統思想

個人と国家、社会の進化、道德と政治というのが伝統思想の要素だった。『大学』の「修身、齐家、治国、平天下」については日本でもよく知られている。個人の修養を積み、それを家族に及ぼし、さらに国、天下に及ぼし、同心円状にそれが拡大していくという思想である。この考え方は個人レベルにどんな思想でも入れることができ、それに応じた結果を生み出さうる一種の関数のようなものである。「三世説」とは、世の中は、最初は乱れていて、次第によりくなり、最後に太平の世が来るとい

う三段階の考え方で、ある種の社会進化論である。「内聖外王」という『莊子』に出てくる概念がある。内聖とは道徳的規範によって、心を正し、意を誠にするという流れであり、外王とは、家を齊えて国を治め、天下を治めるといふ政治的な流れで、この2本の筋の折り合いをどのようにつけるかということである。李沢厚の研究(『中国古代思想史論』北京・人民出版社、1986年、267～276頁)によれば、孔子の時代は内聖と外王は相対的に統一されていたが、その後乖離し、孟子の時代、乖離を正し、内聖に重点を置くようになり、宋儒朱子学から外王は内聖の延長、つまり内聖をしっかりやればいいという道徳偏重になっていった。

日本で道徳と政治について論じた人々の中から荻生徂徠、大隈重信、西周、福沢諭吉の見解をみておく。荻生徂徠は、「後世の儒者は莊子の内聖外王〔中略〕の説を聞き慣れているので天下国家のことは全部後まわしだと考えた。そこで人を解釈するにも、天理を用いたり愛を用いたりして、重点をもっぱら

自己の内部に帰着させ、自己一身を完成させるにとどまっている。悲しいことではないか」(『荻生徂徠』中央公論社、1983年、147頁)と言って、外王の部分非常に重視していた。政談などもその反映とみることができる。大隈重信は、「孔子に於ては修身齊家が治国平天下の要義であつて、一身を修め正しくすることが政治の根本義と考へられた」(大隈老侯遺著『東西文明之調和』早稲田大学出版部、1990年、282頁)と述べ、孔子ではこの両方が統一されていたとしている。西周は荻生徂徠と似ており、「誠意・正心ができると天下は平らかにになると心得て、何でも格物・致知、誠意・正心というから、それさえできれば治国・平天下の事業は、別に学問もせずその利害得失を講明せずとも自然にできるようになる。心得て、禅宗の坊主が坐禅をするようなことを政をするの本と思うは、いなく取りそのうたことをごさる」(『西周 加藤弘之』中央公論社、1984年、75頁)ということ、政治は政治で独自にやらなければならないという主

張をしている。福沢諭吉に「儒教主義」(1883年)という文章がある(『福沢諭吉全集』第9巻、岩波書店、1970年)。福沢は「儒教主義とは政治と道徳と打混りたる一派一種の学風にして、若しも之を分析したらば、其成分の七分は治国平天下を占め、残余の三分通りが独り道徳の部分なるは言ふ迄もなき明白の事実なりとす」(268頁)と述べている。政治と道徳は混合体ではなく親和体であり、一体化していると言っている。また、福沢は「修身齊家治国平天下」の次に、「若しも古聖賢をして今代の新世界に再生せしめて各国交際の現状を一覽せしめ、国の存亡も中央内部に在らずして却て外国より来るとの理を合点せしめたらば、治国平天下の外に必ず外国交際なる一個条を附け加るに相違なかるべし」(274頁)と述べている。伝統思想を使って新たな時代に応じた思想を説明しているということが出来る。

### 三・近代における東洋思想と西洋思想

日本における伝統文化の転型について、佐久間象山の例を挙げる。『省魯録』（岩波書店、2001年）では、五つめの楽しみとして東洋の道德と西洋の芸術「科学を応用した技術」を兼ね備えることと述べている（25頁）。『象山先生詩鈔』無題（『象山全集』上巻、信濃教育会編纂、1913年、896頁）では、「東洋道德西洋芸、それぞれが寄り合わさって一丸になる。大地の周囲一万里、半分欠けてよいことがあろうか」と言っている。

朝鮮では「東道西器」「衛正斥邪」という思想があった。「正」とは朱子学、「邪」とは西学を指す。朱子学を守らなければならぬという鎖国攘夷の考え方である。朝鮮には開化思想もあり、例えば朴珪寿は初期開化派の中心人物で、1872年に清国に行き洋務運動を視察している。姜在彦『姜在彦著作選 第三巻 朝鮮の開化思想』（明石書店、1996年、211頁）によれば、朝鮮の場合、変法的開化派と改良的开化派に分かれ、変法的開化派は日本の明治維新をモデルにし、改良的开化派

は清国の洋務運動をモデルにしたという。東洋の思想で西洋のものを利用するという考え方は共通していた。

清国の場合、国外に出て西洋思想と接触した人々と国内で伝統思想を堅持した人々に分かれる。王爾敏『晚清政治思想史論』（台湾・商務印書館、1994年）によれば、欧州に派遣された人々には外交官や欧州を遊歴して西洋に直接触れた人々、例えば馬建忠、郭嵩燾、薛福成、海外とくに日本で活動した人々、例えば康有為、梁啓超、章炳麟、孫文ら、留学生あるいは亡命者がいた。翻訳を通して西洋思想を中国に伝えた人物の代表は嚴復であり、『天演論』（岩波書店、2025年）がとくに有名である。もともとは海軍の勉強をするということでイギリスに派遣されたが、海軍に関係することよりも、例えばイギリスの政治、裁判、経済の仕組み、社会のありように関心をもち、本来学ぼうと思っていたことは違う成果を挙げた人物として大變有名である。嚴復は中国に進化論を紹介した人物として有名だが、アダム・ス

ミスの『国富論』、モンテスキューの『法の精神』なども翻訳している。嚴復はスペンサーの社会進化論に関心を持っていたが、進化だけではなく、道德の役割に着目したハクスレーの書を翻訳、紹介した。「物競」（生存競争）、「天沢」（適者生存）などの言葉が一世を風靡した。嚴復は「中体西用」について、体と用とは一つのものと言っているが、中学と西学とは異なっていて、中学には中学の体用があり西学には西学の体用があると述べ、洋務的な考え方に同意していない。「原強」（強さとは何か）という文章で、「原強」とは民を利するに他ならない。民が必ず自ら利することができるようになることから始める、自ら利するようには自らに由ることから始める、自らに由ることができるとは自ら治めることが必要であるということで自利、自由、自治というところ述べている。中国の伝統思想と西洋思想を関連づけようとして、『春秋』と帰納法、『易経』と演繹法を結びつけている。日本の東洋道徳、西洋芸、中国の中体西用、朝鮮の

東道西器と、維新、洋務・変法、開化という転型が東アジアの19世紀の半ばから末にかけて確認できる。

「三世説」は漢の何休が有名で、世の中は、最初乱れていて、徐々にまとまり、最後に「太平世」が来るという社会進化の考え方である。龔自珍は最初治っていて、それが乱れて衰退するという逆のモデルを考えた。魏源は退化思想と進化思想を組み合わせた歴史循環論を唱えた。康有為は堯乱世が夏、商、周、升平世が君主、君民共主、そして太平世、民主（この場合の「民主」は「民から選ばれた主」の意味）の時代があるが、世界が各地で必要とする制度を使えばよいと述べている。譚嗣同は逆順三世モデルを唱え、梁啓超は三世二段モデルで、前堯乱世、後堯乱世という形で進むものとし、さらに酋長が争う時代、寡頭専制、君主専制、君主立憲、總統民選、無總統と変化すると言っている。これらの公羊学派に対して章炳麟は批判的で、三世と三統の時間の幅を混同していると批判している。

三世説では、進化と退化の順序など

いろいろなバリエーションがあったが、進化とは過去から未来への流れであることが認識されるようになったのは進化論と関連していた。

福沢諭吉の『文明論之概略』（岩波書店、1995年）の非常に重要な考え方は相対化である（「事物の輕重是非は相対したる語なりと云へり。されば文明開化の字も亦相対したるものなり」24頁）。世界は文明、半開と野蛮に分かれ、野蛮が半開になって半開が文明になっていくというのはすべて相対的であるから、今野蛮であってもそれは半開になって文明に進んでいくという考え方である。梁啓超は日本亡命後の1899年に三世説と福沢諭吉の三つの段階説を結びつけ、「ヨーロッパの学者は世界人類を三つの段階に分けている。一が野蛮、二が半開、三が文明である。『春秋』では堯乱世、升平世、大平世である。いずれも段階があり 順序に従って進んでいく。これは進化の行為で世界人民公認のものである」（『文野三界之別』『飲冰室專集之二』北京・中華書局、1989年、

8頁）と指摘している。

#### 四．康有為の思想

康有為にとっての古代と近代の関係はいかなるものだったのか。「託古改制」つまり昔の制度に倣って改革することを主張した。孔子を借りて世の中を変革していくという考え方である。康有為でもっとも有名なのは大同の考え方である。

自分たちは小康の時代に生きているけれども大同を目指すという考え方で、『大同書』は、国境、身分、階級、人種、性差、家族制度、産業間の差、地方差、生物の差、これらの違いを見定めて取り除くという発想であった。

『大同書』の三つの段階（堯乱、升平、太平）の太平の世になるとこの大同が実現すると考えた。康有為は清朝の皇帝に上書し、その中で明治の新政に着目して、日本は山の險しい小島だが君臣が変法して政治を刷新して、十数年ですべて立て直したと言っている。

『大同書』に先がけて康有為は清朝への第六上書の中で日本の明治維新に倣って変法を行い、上書の自由を認め

優秀者を抜擢する制度局を新設して政治機構を改変することを提案し、光緒帝はこの上書で変法を決意する（『明定国是』発布、1898年）。『日本変政考』では日本について、「泰西（ヨーロッパ）が500年かけて講求したものを日本は20年で成し遂げた」（『康有為全集（増訂本）』第四集、北京・中国人民大学出版社、2020年、103頁）という。また「ヨーロッパは財富と兵力で地球を横行し、数万里を超えて人の国を滅ぼし、人土を削った。その兵艦の精巧さ、その製造の巧みに驚いた。中国でも日清戦争以前の西洋人論は大体このようなものだった。日清戦争敗戦後、より深く探求し、ヨーロッパの強さは武器や機械や兵にあるのではなく、学校にあることがわかり、学校に言及するものが増えた。だが実はヨーロッパの強さは政体が優れていることにある。政権には一、立法官、一、行政官、一、司法官がいる。（『中略』三官が立ち、政体は立ち三官は互いに侵さず（『中略』（同上、115頁）、

「日本の変法の始めは先に銃や大砲を買ったり洋操をやらせたりしたことではなく、まず戸籍、地図、飢餓への備え、賞罰、学校、商業などに留意したことにある」（同上、127頁）。つまり代表的な洋務派のように大砲を買えばいいということではなく、民政が重要で、その点で日本が参考になると指摘したのである。

## 五. 戊戌変法、戊戌政変

1898年6月以降、人事面で変法派と変法反対派の暗闘が始まり、9月に入って動きが激しさを増す。変法派は袁世凱の軍を榮禄の指揮下から離脱させようとするが、袁世凱は兵力でかなわないと判断し、変法反対派に付く。9月20日、伊藤博文が清国漫遊の途中、故宮に光緒帝を訪ねる。『伊藤博文秘録続』（平塚篤編、原書房、1982年）1898年9月20日の記述（128～129頁）は示唆に富む。

【清帝】貴我の両国は、地勢上同じく一州の内にあって、最も親しく且つ最も近く相接して居る。目今我国勢の改

革最も必要に逼って居るに際し、朕の望む所は貴爵の隔意なき意見を聞きたいと思ふことである。貴爵宜しく此意を体し、改革の順序方法等について、詳細に且つ忌憚なく朕が総理衙門の王大臣等に指導する所あらわたい。

【伊藤公】敬んで論旨を頌し奉る。若し王大臣諸公から諮詢を辱のうしたならば、臣が實際に見た所により、苟くも貴国に利益ありと信ずる所は、必ず誠心誠意を以て具陳するであらう。

【清帝】常に貴国と同心協力して長く親密なる国交を継続したいと思ふことは、朕が何物よりもまして望む所なのである。

変法派は伊藤の変法支持を期待するが、翌日、政変が起こり、西太后が權力を掌握する。大隈外務大臣に宛てた在北京・林樵助臨時代理公使の電文は、「清国の諸改革に対し今や重大なる政事的反動起これり」「皇太后陛下は再び国務御親裁あらせらるべき旨詔勅を発せられたる由。張蔭桓の邸宅は昨日軍隊にて囲まれたり。（『中略』其目的は

当時同邸内に居住せりと思せられたる康有為を捕縛する為めなりしも同人は其前日既に北京を発したるを以て同邸に在らざりき。尚ほ此他縛に就きたる者数名ありたる由なり。今後如何なる事変生起すべきやは予言すること難し」([https://www.jacar.archives.gov.jp/das/image/B03050090500\\_7枚目\\_アジア歴史資料センター](https://www.jacar.archives.gov.jp/das/image/B03050090500_7枚目_アジア歴史資料センター))と緊迫感をもって伝えている。

康有為は英国船で香港に向かう。梁啓超は北京の日本公使館に駆け込み、林権助に、「小生はこの三日の内に番所に引ばられて、死んでしまふんです。それで是非あなたにお願いいたしておきたい事が二つ有るのでございます。あなたが我が支那のことを猶お心にかかれ、幸ひに私へのよしみをお考へ下されて、何卒一言お許し下さい」と書き残し(林権助述『我が七十年を語る』第一書房、1935年、90頁)、この後、軍艦大島に乗って日本に亡命する。康有為、梁啓超は日本に亡命した後、早稲田鶴巻町に住む。その後、康有為は日本から北米ヨーロッパ、ペナン、

インド〔中略〕亡命の旅を続け、幽閉されていた光緒帝を救い出そうとする活動を行う。同じころ、孫文は革命を目指してやはり世界を回っており、立憲派と革命派が世界各地でそれぞれアピールをしていた。

梁啓超は亡命後、唐才常の蜂起で一時的に上海に戻ったが、その後、再び日本で言論活動を続ける。欧米も遊歴している。やがて辛亥革命が起り、中華民国建国後、中国に戻る。そして司法総長、財政総長などの大臣職、清華大学教授、北京図書館長なども務めた。大隈重信が国に戻っての活躍を期待していたとするならば、期待通りに活躍したということになる。1915年に執筆した「中日交渉彙評」(『飲冰室文集之三十二』)の中で、日本に対して批判的な見解を述べているが、文面ににじむ複雑な心情を読むことができる。梁啓超は政治思想の面でボルンハックの説(『国家論』早稲田叢書、コンラート・ボルンハック原著、菊地駒治訳述、早稲田大学出版部、1903年)をもとに開明専制論を展開した。今日中国は

もとより専制君主国と称している、これを共和立憲制に変えようとするれば、必ず革命を行わなければならない。しかし革命によって共和を得ることはできず、かつてまた専制になってしまふと述べている。これはフランス革命に批判的な論調をもとにした考察で、開明的な専制体制を説いている。一方、孫文は民族主義、民権主義、民生主義で有名な三民主義をもとに、清朝打倒をめざしていた。20世紀の初頭、孫文、汪精衛、章炳麟らの革命派と、康有為、梁啓超らの立憲派が、東西文明の結節点としての日本において、日本語に訳された西洋文献やそれぞれの主張にもとづいた思想を展開し、中国の将来をめぐる激しい論戦をくりひろげたのである。

## 六. 辛亥革命

辛亥革命の前後、孫文はアメリカ型大統領制をめざし、宋教仁は議院内閣制で大統領権限を制限する体制をめざし、康有為、梁啓超は「虚君共和制」を主張した。皇帝は存在するけれども権力を持たず、共和制を行うというも

のである。康有為は世界の政治体制を分類し、イギリスも共和制だと言って、「君主からのみ論ずれば専制と立憲はどちらもこれを有し互いに近いのではないか。民権から論ずれば立憲と共和は実はいたって近く、君主はいるけれども専制の政体とは氷炭のごとく相反する。共和の君主はその虚名は君主と同じだがその実態はすべて共和である。およそものにはそれぞれ主体があり、専制君主は君主を主体とし、専制を従体とする。立憲君主は立憲を主体として君主を従体とする。虚君共和は共和を主体として虚君を従体とする。故に立憲は君主なきも可、共和は君主の存在を妨げず。すでにこの新政があるので欧人は立憲、共和二政体を定義できず新たに名付けて虚君共和とするほかはない」ということを清朝が滅びていく過程で述べている。実際には孫文が臨時大總統となった後、袁世凱に大總統を譲って袁世凱が後に皇帝を称して批判を受け、それを取り消すという道をたどった。

辛亥革命に対する日本の反応として

は、早稲田大学の関係者が非常に高く評価していたことが目立っていた。大隈重信は、これは従来の王朝交代とは違い、多年の宿痾を一掃しようとして起こったものであると言いつつ（『清国革命論』《三たび》、『新日本』第二巻第一号）、浮田和民は東洋最初の共和国と評価し（『太陽』第十八巻第二号）、永井柳太郎も歴代の革命と比べるのは甚だしい誤解であると述べている（同上）。康有為は辛亥革命後、早稲田大学で講演した。それは「余の觀察せる列国政治發達の原因」という文章にまとめられている。内容は、立憲の国とこの島国だ、ということ、実際にはイギリスと日本のことを意識していた。康有為は共和を求めても帝政となってしまう、共和を求めても専制となるということを1917年になっても言うており、実際の中国の歩みとは異なる思想をそのまま持ち続けていた。

## 七. 西洋文献の翻訳と近代人文

### 社会科学用語

熊月之『中国近代民主思想史（修訂本）』（上海・上海社会科学院出版社、2002年）の西洋文献の翻訳リスト（334～341頁）の中から梁啓超に焦点を当てれば、梁啓超の日本亡命後の学術的貢献を見てとることができ。日本では漢語の造語力を活かして西洋語の概念を表現していた。蘭学者の訳語を使ったり、古典中国語の語彙を使ったりして、まったく新しい語をつくりだした。一つ例を挙げると、「政治」という語は、『書経』に出てくる。これと *politics* という言葉を明治の日本で結びつけたということである。部品は中国語に存在していたけれども、それと西洋の概念を結びつけたと解釈できる。王力『漢語史稿』（北京・科学出版社、1958年）では経済、選挙、教育、文化、文学、革命などの例を挙げている。北京師範学院中文系漢語教研组『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』（北京・商務印書館、1959年）も日本語から中国語に入った語のリストを作成している。哲学、科学、物理学などの語はこのまま中国に

入った。嚴復は直接英語から翻訳し、訳語の漢訳に工夫を凝らしたが、梁啓超は日本の訳語を積極的に使った。例えば嚴復が考えたのは「母財」（キャピタル・ストック）、梁啓超あるいは日本への留学生は「資本」を用いた。嚴復の訳語が難解だったのに対して、日本の訳語はわかりやすいものが多く、中国語の中に普及していった。中国でいう「日本語借用漢語」について、1950年代末にこのような研究成果が発表されていたことは興味深い。

ここで問題になるのは、一部の語について、古代からあった概念と近代的概念の間に齟齬はなかったかということである。西洋の概念をそのまま受け入れたものもあれば、東洋文化を背景にそれまでの概念からすんなり切りかえが行われなかった例もある。「権利」という語は、近代以前は「権勢と利益」をひろく指した（金観濤・劉青峰『觀念史研究』香港・中文大学出版社、2008年、107頁）。『万国公報』翻訳のころからrightの対応語となる。嚴復は最初「直」という語を用い、日

本でも「権理」という語が用いられたことがある。なぜ「利」ではなく「理」を使うとしたのか。『広辞苑（第七版）』（岩波書店、2018年）では「権利」の①として、「荀子（勸学）」権勢と利益。権能」と書かれている。②のAは「一定の利益を主張し、また、これを享受する手段として、法律が一定の者に賦与する力」となっている。『現代漢語詞典（第七版）』（北京・商務印書館、2016年）では「公民あるいは法人が法にもとづいて行使する権力および享受する利益」とある。現在に至る、西洋の概念と東洋の概念の変遷と現在の概念の内実はどのような関係にあるのか。経済もともと経世済民つまり「世のために人々を救う」という意味で、日本でこれをエコノミーの対応語としたものである。嚴復は、「日本ではエコノミーを経済と訳しているが中国では理財としている。経済では広すぎ、理財では狭すぎる。そこで私は計学という語を考案した」と述べ、梁啓超は経済という語を日本と同じようにエコノミーの意味で使うこと

にはためらいがあると書いている『觀念史研究』香港・中文大学出版社、2008年、284頁）。現在でも経済とは「もともとは経世済民だ」などといわれるが、現在に至るまでに意味の「よじれ」があったのであり、この「よじれ」を理解しておかないと意味上混乱が生じる。このようなことをとまづいていくことも概念の歴史をたどるうえでは必要なことである。（2025年7月24日・公開講演会）

#### 筆者略歴（さいとう・たいじ）

1956年神奈川県生まれ。  
1982年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業（在学中、北京語言学院〔現北京語言大学〕、復旦大学留学）。1984年早稲田大学大学院文学研究科博士課程前期修了。  
2004（2006年）中国社会科学院近代史研究所訪問学者。現在、早稲田大学政治経済学術院教授。「東洋政治思想史」「政治学 中国語文献研究」（政治経済学部）、「アジア文化研究」（大学院政治学研究科）を担当。